

日本旧石器学会

ニュースレター 第47号  
NEWS LETTER No. 47

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



## 鈴木遺跡の国指定史跡化への取り組み

小川 望 (小平市地域振興部)

### はじめに

令和3年(2021)3月26日付官報号外第70号文部科学省告示第44号により、鈴木遺跡は正式に国史跡に指定された。平成25年(2013)4月から開始された「鈴木遺跡国指定史跡化推進事業」は、実に8年の歳月を要して完了したことになる。指導委員の先生方をはじめ応援いただいた市民の皆様、数々のご協力をいただいた多くの方々、また文化庁、東京都をはじめとする関係諸機関の皆様へ厚く御礼申し上げます。

これに先立つ令和2年(2020)11月20日、文化審議会は文部科学大臣による諮問に対し、鈴木遺跡を含む12件の史跡指定を妥当とする答申を行っており、指定はこの時点でほぼ確定したとはいえ、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によるものか、なかなか正式な告示日が決まらず、指定後の発行を想定した市報や、指定後に配布予定の各種印刷物等の校了が打てず、肝を冷やす一幕もあった。



鈴木小学校D地点における礫群の出土状況遠景  
(1974年頃、左が北)

以下、非力を顧みず国指定史跡を目指した担当者一人として、指定に至るまでの長い道のりについて略述したい。

### 1. 鈴木遺跡と調査の概要

東京都小平市鈴木町、回田町、御幸町に所在する鈴木遺跡は、武蔵野段丘上、武蔵野台地東半部にみられる樹枝状の開析谷のひとつである石神井川の谷の先端部に立地し、東西約580m、南北約620m、約22万㎡に及ぶ、後期旧石器時代の遺跡としては関東地方最大級の規模を有する集落遺跡である。

昭和42年(1967)に大沢鷹邇氏により発見され、「回田遺跡」として報告された後、昭和49年(1974)に現在の鈴木小学校の建設工事に先立ち、近世の水車遺構の存在などがきっかけとなって本格的な発掘調査が実施された。その後、都道、地下通学路、集合住宅、事業所の建設、道路の拡幅に伴う擁壁の建設等、様々な原因で調査を行い、また遺跡の範囲確認調査も含め、のべ80数次、約22,400㎡以上の発掘調査を実施し、旧石器時代の遺物だけで石器44,203点、礫77,852点の出土を、54冊に上る発掘調査報告書において報告してきた。

これらの出土遺物や、礫群の標本、地層の接状剥離標本等は、後期旧石器時代の良好な資料として断片的に引用されたり、展示に供されたりするものの、筆者の怠慢と力量に比して遺物量が膨大であったこともあり、その全体像の提示は行われないうままであった。

## 2. 国指定史跡化への気運

平成に入るところから遺跡を取り巻く環境にも変化が現れ始めていた。これまで武蔵野新田に起源を有する農地やこれを受け継いで企業等によって設置された比較的規模の大きな研修所等の施設がひろがる遺跡周辺の景観も、平成10年代から宅地造成を中心とする開発が徐々に行われ、これに伴う事前調査によって遺跡が蚕食される状況となっていた。

平成15年には鈴木遺跡の本格的な調査の初期から小平市文化財保護審議会会長として、また小平市遺跡調査会会長として指導に当たっておられた國學院大學の加藤有次先生が突如鬼籍に入られた。先生は予め「鈴木遺跡を国の指定史跡に」というご希望を漏らされていたこともあり、また遺跡のより効果的な保存と周知、活用を目標として、国指定史跡化を目指すことを夢想したが、当時は目の調査に追われて一步を踏み出せずにいた。その後平成20年代も半ばになって、ようやく開発も一段落してきたところから、国史跡化に関しての各種情報を収集するなど、具体的な検討に入ろうとしていた。その矢先、農林中央金庫小金井研修所の閉鎖とその開発計画が明らかになったため、これに対応することとなったが、これまで安泰と思われていた遺跡の中核部における大規模な開発計画が明らかになったことは、ますます遺跡の国指定史跡化への必要性を突きつけられた思いであった。

ちなみにこの小金井研修所跡地は、所有者である農林中央金庫の遺跡保存へのご理解から、北半が小平市に寄贈されることとなり、国指定史跡化への大きな援護となったことを付記し、感謝いたしたい。

## 3. 鈴木遺跡国指定史跡化推進事業

さて、平成25年度から当時文化財を所管していた教育委員会事務局教育部生涯学習推進課内でのコンセンサスを得て、国庫補助金を受ける形で小平市の事業（実行プログラム）としての予算化が実現し、鈴木遺跡国指定史跡化推進事業として公式に動き始めることができた。

これを受けてまず文化庁、東京都に相談を行い、市民からの史跡化への要望の盛り上がりや鈴木遺跡発掘調査総括報告書の作成が特に当面必要とされる条件として提示された。

市民からの史跡化に向けた要望の盛り上がりに関しては、市内にある周知の遺跡が鈴木遺跡を含めて4か所に留まることもあり、多くの市民にとって鈴木遺跡は「聞いたことはあるけどよく知らない」存在であった。このため、体験講座を「ナイフ形石器

作り」にしたり、特別展のテーマを「小平の遺跡」にするなど、例年行っていた文化財関連のイベントを鈴木遺跡に関するものに統一したり、新たな企画を実施したりすることを通じて、市民の関心を高めて行くよう工夫した。

一例をあげれば、平成26年6月21日の日本旧石器学会の総会を小平駅前の小平市市民会館で開催していただき、これにあわせて午後からの総会の前、午前中に稲田孝司先生に講演をお願いした。この時には、例年の講演会から予想していた人数をはるかに上回る数の市民の来場があり、慌てて閉鎖していた会場後方の座席を開放することとなった。かように多くの市民の方々が会場を埋めている様子は、国指定史跡化に対する熱気として、来場されていた文化庁の担当官にも伝わったものと思っている。

総括報告書に関しては、佐藤宏之東京大学教授（考古学）、長崎潤一早稲田大学教授（考古学）、久保純子早稲田大学教授（自然地理学）の3名の有識者による「鈴木遺跡総括報告書作成委員会」の指導を仰ぎながら発掘調査の成果を統一した基準のもとに再整理し、遺跡の全貌を概観できる総括報告書の作成を行うこととなった。

委員会の劈頭指摘された課題は、既刊報告書での提示データの補綴であり、特に『鈴木遺跡Ⅲ』の再提示である。本格的な調査の嚆矢である鈴木小学校



鈴木遺跡の地層と文化層

地層写真は鈴木小学校D地点（1974年頃）

地点の報告でありながら、「Ⅲ」の巻数が付されていることから分かるように、小平市としてはほとんど初めての大規模調査であったことによる体制の不備等の要因からか、調査終了から報告書の刊行に向けた整理の着手までに何年ももの空隙が生じており、遺物属性表の欠落や遺物図版の提示方法などにおいてデータの不備が見られ、当時としても見劣りのする報告に留まらざるを得なかったようである。

これ以外の報告書を見ても、礫群や炭化物片集を含めた各種の分析は調査単位の範囲内に限定されているばかりでなく、調査主体、調査年次、調査担当者の見解の相違等により、データの記録や報告方法、立川ローム内の所属層位、遺物や石材の名称などにおける不統一などが散見され、さらには遺物の収蔵方法等においても様々な差異や混乱が生じており、隣接する地点間であっても、容易に比較検討を行うことができない状態であった。

こうした課題を洗い出すために、支援会社の協力を得て、まずは既刊報告書のPDF化および各報告書別の遺物組成表のデータ化を実施した。

一方、委員会では鈴木小学校地点および隣接する都道の敷設に先立つ一連の調査地点においては比較的まとまった範囲を立川ローム基底部まで調査しており、出土遺物の点数だけでも上記遺物総数の8割以上を確認、報告しているところから、ここを「谷奥部」と名付け、特に重点的に分析再整理の対象とすることが提案された。具体的には『鈴木遺跡Ⅰ』から『鈴木遺跡Ⅳ』までで報告された地点に流域下水道工事地点を加えた部分であるが、幸いにもこれらの調査地点は鈴木小学校地点で設定されたグリッドシステムを共有していた。

そこで、測量会社への委託によってカスタマイズしたGISシステムによる遺物の三次元位置情報の可視化を行うこととし、谷奥部を含め全ての報告書に提示されている属性表、保管されていた地形図等に基づく位置情報、地形情報の入力（デジタル化）を進めることとした。

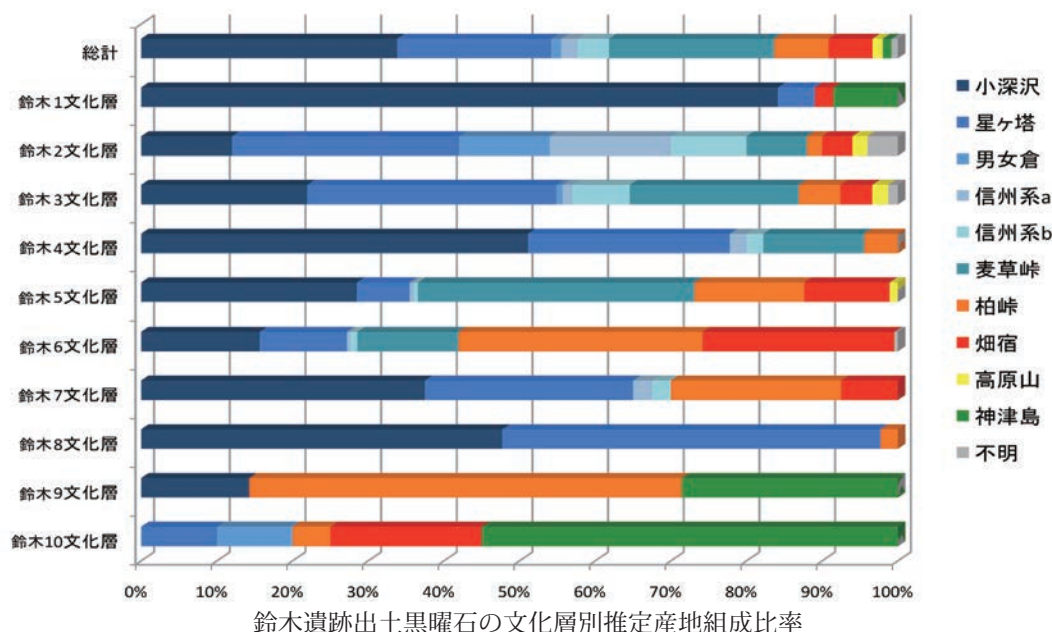
しかし、前述『鈴木遺跡Ⅲ』では付表の形でドット図は提示されているものの、どのドットがどの遺物に対応するかは明らかでなく、深度との照合も不可能で、属性表を欠き、各遺物の出土位置情報が記載されていないことが最大の難関であった。

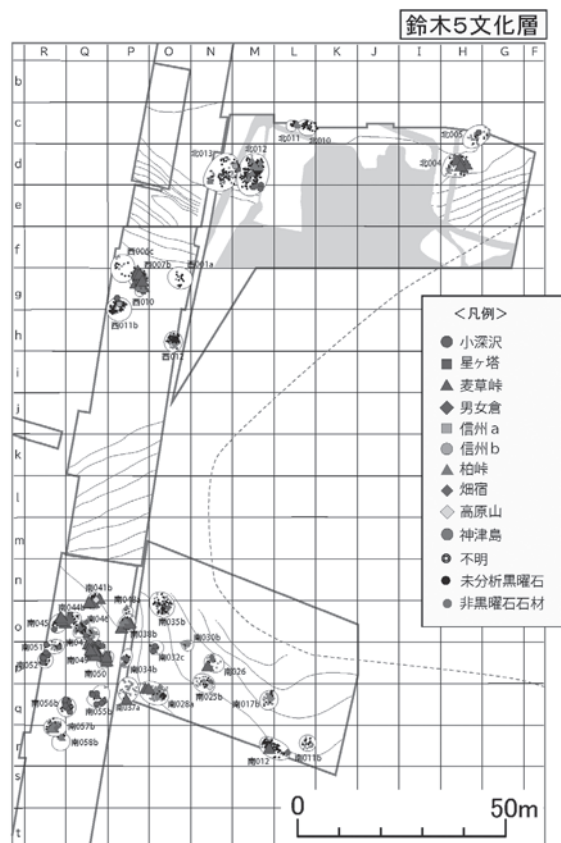
ところが、関係者のご尽力で手書きのデータを整理された形で保管されていた当時の調査員とコンタクトがとれ、これを借用することができたことによって、この問題は解決へと大きく前進した。

これらのデータ入力と、そのデータに基づくGISシステムが稼働するまでの間、ボランティアとして参加していた匿名希望のスタッフにより、イラストレータを利用して簡易的に三次元の位置情報を紙上に表示する作業が行われ、予め大まかながら石器ブロックの把握を進められたことは、今振り返ってもきわめて大きな貢献であった。

このころ、下原・富士見町遺跡の膨大な調査成果をまとめられた鈴木美保氏の参加を得て、再整理作業は一気に進み、GISシステムの稼働開始もあって、抽出された石器集中部を単位として、垂直分布や石器の様相を加味した形で上位から鈴木1文化層、鈴木2文化層・・・と名付け、X層bに位置付けられる鈴木12文化層まで、都合12枚の文化層の分離を行うことができた。

根拠とした当時の調査や報告には現在の観点から





鈴木遺跡谷奥部の鈴木5文化層における  
石器集中部と黒曜石推定産地

すると、所属する自然層の把握や記録方法に不備があり、また石神井川源流部を取り巻く傾斜地であるが故のベンチマークの誤認と思われる標高値のずれが一部に存在するなど、一定の限界や課題を包摂しつつも、武蔵野台地上だけでも1遺跡としては突出した12枚の文化層と、これを構成する19,769点の石器からなる188か所の石器集中部の抽出は、鈴木遺跡の拠点遺跡としての位置づけを具体的に示した大きな成果となった。

さらに特記すべきことは、東京学芸大学との共同研究という形で、既刊報告書に実測図が掲載されている黒曜石製の石器のうち、接合関係にあるものを除く大半の1,563点について、蛍光X線分析による産地推定を実施することができたことである。

その成果は、遠隔地石材の産地とその変遷を示すにとどまらず、上に例示したように、抽出された石器集中部、分離された文化層という時空間上の位置との突合により、さまざまな検討を可能にする基礎データを提示するものともなった。

#### 4. 総括整理の成果還元と今後の取り組み

これらの、単なる再整理に留まらない分析の成果は、指導委員3氏に鈴木美保氏、蛍光X線分析を担

当された東京学芸大学の新免歳靖氏を加えた5氏にご寄稿いただいて『鈴木遺跡発掘調査総括報告書』としてまとめ、令和2年3月に刊行、同7月には文化庁への国史跡指定の意見具申書に添えて提出することができた。

また、PDF化した既刊報告書と、谷奥部の出土石器全点の属性表、一部新規作成を含めた石器集中部ごとの報告書掲載実測図、黒曜石の蛍光X線分析の根拠データは、クリエイティブコモンズの表示こそ行わなかったが、商用利用を除いての複製を許諾する形で付編DVDとして刊行し、総括報告書とともに市単費で作成した分を頒布できるようにした。

また、この総括報告書のデータに基づいて、一般向けの概要版解説書を作成し、指定告示後の令和3年3月末からは、鈴木遺跡資料館等での配布を行っている。また、小学生向けの解説リーフレットも作成し、市内小学校の児童全員への配布を行うなどの形で、市民への還元を行っている。

令和3年度以降は保存活用計画の策定を行うことが当面の大きな目標である。また、農林中央金庫より寄贈された小金井研修所跡地北半は、鈴木遺跡保存管理等用地として残置施設の解体や維持管理を行ってきたが、今後は保存活用計画の中の重要な一環として位置付け、国指定史跡としての鈴木遺跡のもつ意味や価値をより広く知り、親しんでもらうための施設としての整備を進めていく予定である。

一方、今回の総括報告書作成のために行った整理作業の過程で得られた知見やデータを利用して、鈴木遺跡資料館の展示のリニューアルにも着手する計画である。

#### おわりに

整理作業の過程で、谷奥部の出土資料の中には良好な未報告資料が一定数遺っていることが判明した。また、小学校地点と、これに隣接する都道地点にまたがる一角には、鈴木遺跡にはないと考えられてきた環状ブロック群と思われる石器集中部群が存在する可能性も認められたが、今回の総括報告書では詳しい検討は行いえなかった。今後はこれらの未了の課題についての追究も視野に入れて、遺跡の保存活用を目指していきたい。

最後になるが、国史跡化への予算化を提案した際には、3、4年の事業との見通しを提示していたが、結果的には完了までこれを優に倍する期間を要したことになる。辛抱強く予算措置の継続に応じていただいた小平市の理事者、財政担当にも御礼申し上げたい。

## 2021年度 日本旧石器学会第19回 総会・研究発表・シンポジウムの開催

2021年6月19日（土）・20日（日）に、下記のとおり、2021年度日本旧石器学会第19回総会・研究発表・シンポジウムを開催します。新型コロナウイルスの感染予防のため、オンラインによる開催とします。20日（日）に開催するシンポジウムのテーマは、「北海道の旧石器時代と集団」です。昨年度、残念ながら中止となったシンポジウムのテーマを引き継いで開催します。更新世の哺乳動物の遺伝データに基づく集団動態についての報告に引き続き、北海道をフィールドとする考古学者による考古資料についての分析の報告をいただき、それらをふまえて北海道の旧石器時代における集団の系統や技術、適応の多様性について議論を進めていく予定です。

### 開催方式

- ・Zoomを使用したオンライン開催。
- ・参加者は、5月下旬に学会ホームページに掲載するURLから参加登録を行って下さい。参加登録者にはZoomのURL・パスワードをお知らせいたします。
- ・なお、総会を欠席される方の委任状の様式や提出方法等については、やはり5月下旬に学会ホームページにてご案内いたします。
- ・今年度の総会・研究発表・シンポジウムの参加登録の受付は、学会員であることを条件とします。
- ・要旨集については学会ホームページで公開します。一般研究発表は全て口頭発表です。

### 2021年6月19日（土）

- 開会あいさつ（10時30分～10時35分）  
※10時00分よりオンライン受付開始
- 総会（10時35分～11時35分）
- 学会賞授賞式（11時35分～11時45分）
- 昼食休憩（11時45分～13時00分）
- 一般研究発表（13時00分～17時00分）
  - ・13:00～ 酒巻孝光「星野遺跡新資料の概要」
  - ・13:20～ 須賀永帰・一ノ瀬菜月・東田和弘・門脇誠二「南ヨルダンの中部～上部旧石器時代における石器石材利用の変化」
  - ・13:40～ 海部陽介・郭 天俠・詹 森・久保田好美「琉球列島における後期旧石器時代“漂流説”についての実験的検証」
  - ・14:00～ 国武貞克「中央アジア西部の初期後期

旧石器時代（IUP期）石器群の石器組成と技術組成」

- ・14:20～ 上峯篤史・村瀬早紀・村井咲月・吉田真優・鈴木しゅん菜「岐阜県下呂市湯ヶ峰流紋岩原産地における考古学・地質学的調査（1）」
- ・14:40～ 休憩
- ・15:00～ 熊谷亮介「旧石器研究における『機能形態学』に向けて―山形地域の石刃石器群を対象とした試論―」
- ・15:20～ 野口 淳「ナイフ形石器『型式』再考」
- ・15:40～ 青木要祐・佐々木繁喜・傍島健太「本州における白滝型細石刃石器群の黒曜石利用」
- ・16:00～ 橋詰 潤「小瀬ヶ沢洞窟遺跡出土のいわゆる『植刃』と関連資料の再検討」
- ・16:20～ 千葉 史・横山 真・神田和彦・野口 淳「石器接合資料の3D計測と可視化・定量化」
- ・16:40～ 藤野次史・中村由克・沖 憲明・稲村秀介・森本直人「広島県域における地域石材と石材調査―高田流紋岩類を中心に―」

### 2021年6月20日（日）

- シンポジウム（9時30分～14時00分）
  - ・9:30～ 研究企画委員「趣旨説明」
  - ・9:40～ 鈴木 仁「氷期最盛期の日本産小型哺乳類の集団動態を考える」
  - ・10:05～ 高倉 純「北海道における細石刃技術の出現と集団動態」
  - ・10:30～ 山田 哲「日本列島における細石刃石器群の成立―特に稜柱系細石刃石器群の生成と特性について―」
  - ・10:55～ 赤井文人「北海道後期細石刃石器群の遺跡間比較」
  - ・11:20～ 夏木大吾「北海道における更新世・完新世移行期の人類社会」
  - ・11:45～ 休憩
  - ・13:00～ パネルディスカッション  
シンポジウム報告者全員、司会（研究企画委員）
- 奨励賞発表・閉会セレモニー（14時00分～14時10分）

※一般研究発表・シンポジウムの発表タイトルは変更になる場合があります。

## 研究グループ活動報告

### 郡家今城遺跡再整理グループ

郡家今城遺跡の再整理作業の目的は、1) 礫群の実態把握、2) 石器群の個体別資料レベルでの把握、3) 礫・石器の悉皆台帳の作成とこれに対応する遺物No付全点分布図の作成であった。この三項目について、再整理作業3年目に当たる今年度までの達成度と今後の予定を以下に記す。

1) 礫群の実態把握 A～H群までの大別8群に帰属する礫の接合作業はほぼし尽くしたと認識している。その結果は、礫群構成礫資料数5,072点、接合点数2,567点（内再整理による接合1,824点）、接合率50.6%。礫個体数は845個体である。各礫個体を構成する礫片ごとの重量と遺物Noを採り終え、台帳の整備を進めている段階であり、初期の目標通り年度内にこれを達成できる見込みである。今後の予定は、2021年度中に台帳のデータをもとに各種集計を行い、礫個体ごとに接合関係を図化するとともに、礫群間関係を明らかにする。

2) 石器群の個体別資料レベルでの把握 A～H群について、群内及び群間接合作業を実施してきた。その結果、報告書時点の接合例のほかに、あらたに21例の接合例を加えることができた。2021年度はこれまでのA～H群の枠を外して個体分類を行い、個体分類に基づいて接合作業を実施する予定である。困難な作業が予想されるが、可能な限り個体別資料単位での石器群の構成を把握する。

3) 礫・石器の悉皆台帳・分布図の作成 既刊の報告書は、ほぼ完全な礫・石器分布図が掲げられているが、遺物台帳の提示はなく、分布図には遺物番号が付されていない場合が多く、そのため観察表に掲げられた主要な石器以外、分布図上での位置確認ができないという悩みがあった。こうした現状を打開すべく、礫・石器の悉皆台帳とこれと付きあわせる遺物No付全点分布図の作成を意図してきたが、一通りの作業を終えることができた。

現在、発掘当時作成された実大の遺物取り上げ実測図との照合を進めているところであり、年度内に所期の目標は達成できる見込みである。2021年度は、これをもとに各種集計を行い、礫・石器の接合関係等の図化をはかるとともに、遺跡内における接合関係を明らかにする予定である。

こうした作業を終えたのち、2022年度中には、再整理作業の結果を公表し、近畿地方の代表的な集落遺跡の分析を、縦横に行えるようなデータ整備をしていくつもりである。（鈴木忠司）

## 関連学会・出版情報

### 東北日本の旧石器文化を語る会

#### 第34回オンライン大会開催報告

東北日本の旧石器文化を語る会第34回大会は、青森県で開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、現地での開催を断念し、オンライン開催となった。ただし、青森大会の代替開催という位置づけではなく、当地での開催は次回以降に延期する。なお、大会のオンライン開催に当たっては、東北大学の先生及び学生の方々の全面的なご協力をいただいた。

東北日本では近年、開発に伴う旧石器時代遺跡の行政発掘が少なく、大学等による学術調査が主体となっている。しかし、コロナ禍の状況で学術調査もまた減少し、発掘調査の速報を主体とする例年どおりのプログラムでは対応が難しい状況となった。そこで、発掘速報に加えて、継続調査の整理等経過報告（安斎・会田報告、工藤報告）、過去の調査の再整理報告（菊池ほか報告、木村報告）や、遺跡の学史的な理解（中沢報告）があり、多彩な内容のプログラムとなった。また、徹底した感染防止策を講じて実施した発掘調査報告（青木ほか報告、長井報告）もあり、今後も同様の状況が続くことが予想されるなかで参考となるものである。

個人的には、低湿地遺跡の学際的な調査報告（長井ほか報告）に関心をもった。当時の情報が膨大に残る堆積環境にある遺跡であり、発掘調査の計画からその実施、野外調査における各種作業、多様な種類の遺物を対象とした整理・分析において、高度な視点や方法等が求められる調査である。また、多くの分野の研究者の参加とそれを統括する能力が求められる。これらの経緯や経過についての詳細な報告は、同様の遺跡を調査するに当たっての指標となるものと考えられる。

今回の大会では、予稿集の取扱いも大きく変わり、開催に合わせた頒布が難しいことから、電子媒体（PDF形式）による無料配布とした。収入が得られないマイナス面はあるが、印刷費がかからないことで、石器のカラー写真を多く掲載できるなどのプラスの効果もあった。なお、予稿集は、永続的な保存も兼ねて「全国遺跡報告総覧」で公開している。

オンラインによる大会を開催してみて、この方法による開催継続を望む声が一定数あった。今後は、現地での通常開催に加えてオンライン配信も同時に行える方法を検討していく必要があると考える。

（小野章太郎）

新刊紹介 シリーズ「13歳からの考古学」

『ヒトはなぜ絵を描くのか』五十嵐ジャンヌ著

2021年 新泉社刊

日本ではほとんどいない旧石器時代の洞窟壁画の専門家中の専門家で、本学会員でもある五十嵐ジャンヌさんが、『ヒトはなぜ絵を描くのか』という、根源的で哲学的なテーマを主題とした単著を、本2021年1月に出版された。しかも専門家に向けてではなく、ティーンエイジャーに向けてである。



五十嵐さんは、2016年11月から2017年9月に開催された「ラスコー展」の学術協力者の一人であり、展示では洞窟内部がきわめて精緻に再現されたばかりか、これまで日本ではお目にかかることもできなかった貴重な旧石器やその時代のポータブルアートもやってきた。国立科学博物館を皮切りに東北歴史博物館、九州国立博物館の3会場を巡回したこの展覧会は、来場者40万人を突破したときく。

東京藝術大学、大阪大学大学院で学ばれた後、五十嵐さんは、フランス国立自然史博物館にて博士号(先史学)を取得、フランスやスペインの50か所以上の洞窟壁画を調査された豊富な経験の持ち主だ。

※

短くて恐縮だが、本書をご紹介させていただく。物語の主人公は歴史が大好きな中学1年生秋山理乃。彼女は、かつて高校の世界史の先生だったキシローじいちゃんと上野の「ラスコー展」に行き、洞窟壁画の魅力にすっかりはまり、夏休みを利用してフランスに本物の洞窟壁画を見に行くことに。

旧石器時代の壁画を見た理乃は、なんで大昔の人は一寸先すら見えない真っ暗な洞窟に壁画を描いたのか、という疑問で頭の中がいっぱい、本書は次のような構成からなる。

- 第1章 洞窟壁画って何?
- 第2章 春休みのフランス旅行(1)
- 第3章 春休みのフランス旅行(2)
- 第4章 動物と人間の違いって何?
- 第5章 文化祭に向けてのアイディアをまとめる
- エピローグ: 10年後の野外調査

※

絵というものは深遠である。たとえばピカソの『ゲルニカ』をみれば、背景に人々のどのような

メッセージ性が込められているのかを慮ることはできよう。

主人公秋山理乃は洞窟壁画から『ヒトはなぜ絵を描くのか』という根源的な問題に、彼女なりに近づこうとしたのか。

これ以上は語るまい。「美術のはじまり」をテーマとする本書を、ぜひお手にとっていただき、主人公とともに芸術の根源の謎にふれていただきたい。

人類を脅かす、たいへんな感染症の喪が明けたら、フランス・スペインの洞窟壁画の旅にぜひ出かけてみたいと思うのである。(堤 隆)

図書紹介『遺跡学研究的地平—吉留秀敏氏追悼論文集—』2020年 吉留秀敏氏追悼論文集刊行会

本書は、吉留秀敏という一人の考古学者を創りあげてきたものとは何か、刊行に賛同した多くの人びとの研究やエピソード、様々な人間模様を通して、その足跡を辿りながら知ることができる。

2013年3月5日、57歳で逝去された故吉留秀敏氏の七回忌にあわせ、2019年3月に発足した吉留秀敏追悼論文集刊行会(発起人:山崎純男[代表]、高橋慎二、木崎康弘、小畑弘己、菅波正人、杉原敏之)によって2020年6月に刊行された。総頁数714頁、献呈論文64、追悼文49、本人の年譜・業績からなる。寄稿者90名、賛同者52名という一個人の追悼論文集としては近年稀な大著である。

本書総体としてみると、各執筆者の論文は故人が直接関わってきた研究テーマに関するものが多く、時代や内容も多岐にわたる。それは、旧石器・縄文時代37、弥生・古墳時代19、古代以降近世まで8という献呈論文の数に表れている。

このうち、旧石器時代に関してみると、九州の尖頭器石器群や細石刃石器群をはじめ、地域性と社会構造に関わるものなどがある。「後期旧石器時代の九州と北海道における地域性と社会の形成」(佐藤宏之)、「九州地方における岩宿Ⅱ期前半のナイフ形石器に関する一試論」(小菅将夫)、「九州の石刃技術」(須藤隆司)、「九州石槍文化再考」(木崎康弘)、「フロンティアの発生と再領域化」(松本茂)、「東九州に所在する石灰岩洞窟遺跡」(綿貫俊一)、「南九州の細石刃石器群と気候変動」(萩原博文・柳田裕三)、「細石刃文化期の細石刃を製作しない集団」(宮田栄二)、「瀬戸内地域の編年に関する覚書」(氏家敏之)、「瀬戸内東部における旧石器時代研究の展望」(森先一貴)、「帯広市川西C遺跡出土石器群と北海道における細石刃技術モードAをめぐって」(高倉純)、「白滝・幌加沢遺跡遠間地点の資料からヒトの行動様式

を採る」(木村英明・Eギリア)、「日本列島における葬送、特に「置葬」における研究」(岡村道雄)等、今日的にみても最先端の研究課題として議論されている内容が多く、九州旧石器文化研究の可能性を意識させるものが多い。

「遺跡学の地平」は、時代、内容を問わず、常に遺跡に向かい合ってきた故人に重ねられた表題で、その研究姿勢を現す言葉としても相応しい。生前、故人は、「遺跡に立って風を読み。そして、当時の風景が復元できれば完璧だ。」ということをよく言われた。鹿児島県出水市上場遺跡の調査者、恩師・池水寛治先生の言葉であり、高校生の頃に参加した上場遺跡が「遺跡学」の原点にある。

故人の創造性豊かな遺跡学研究は、大野川流域における駒方遺跡C地点におけるAT下位石器群の検出、九州における先土器時代の石器群集中分布の構造、さらに剥片尖頭器の機能論や狩猟活動論へと展開していった。一方、分野を超えて多岐に亘る執筆陣は故人の人的な広がりを示し、出水、別府大学、岡山大学、福岡へと移っていく追悼文から世代を越えて多くの人と人を繋ぎ、影響を与え続けたことが分かる。勿論、評者もその一人に含まれる。

多様で細分化した研究が展開される今日、遺跡に立って地域研究にこだわり続けた、稀代の考古学研究者の軌跡と、その想いに共感して集った人びとの研究を重ねてぜひ御一読いただきたい。

現在、本書は在庫切れだが、日本旧石器学会での紹介を期に、購入希望に応じるために部数限定の追加印刷を予定している(販売価格10,000円、送料実費)。希望される方は下記にご連絡いただきたい。

【連絡先】〒818-0131 福岡県太宰府市水城4丁目32-2 真言宗浄覚院 福岡旧石器文化研究会代表 高橋慎二 宛/メール:sugi14zzz@gmail.com

(杉原敏之)

## お知らせ

### メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものですが、これまでその登録についてはあくまで任意のお願いというものでした。

一方、新型コロナウイルス感染拡大にとともに、各種学会行事の変更などがこれまで以上に増加することが予想され、学会と会員、そして会員間でのよ

り迅速な情報共有が喫緊の課題となっています。その解決のためには、メーリングリストの更なる有効活用と登録率の向上が必要であることから、このたび役員会での議論と了承のもと、メーリングリストへの登録を原則として義務化することにいたしました。ご理解を賜れば幸いです。

まだメーリングリストへの登録のお済みでない方は、携帯電話のメールアドレスでも構いませんので、事務局のメールアドレス(jimu@palaeolithic.jp)までお知らせください。

### 会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。ニュースレター同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。これまでもお知らせしておりますとおり、**2018年度より年会費が6,000円になりました**。御理解のほどよろしくお願ひします。

また、会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、同封の会費納入状況を御確認のうえ、2019年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

### 日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード(<http://palaeolithic.jp/join.htm>)し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第47号

2021年5月14日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会  
山崎真治・赤井文人・山田和史

発行：日本旧石器学会

事務局：〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学文学部 渡辺丈彦研究室気付

E-mail：jimu@palaeolithic.jp

HP：http://palaeolithic.jp/index.htm